

Annam Fantasia

Mariko Sumikura

安南幻想

すみくらまりこ 著

Annam Fantasia

安南幻想

Mariko Sumikura

すみくらまりこ

散文詩「安南幻想」

目次

ベトナム土産

海あがり

安南幻想

薫香の里

魔の白粉

天恵の菓

象の行列

孔雀献上

酔夢尽きず

ベトナム土産

大阪の詩友がベトナム旅行から戻って、わたしに藍染付の一輪挿しをくれた。淡い藍色で南国の木の葉がさらりと描かれていた。蓮茶の甘い香りが後を引いたとき、突然わたしのなかに急に「安南」という古の地名が懐かしい響きをもって立ち昇ってくるのを感じた。安南染付、それはいまでも盛んに作られている。

四百年も前に近世の京都人が、行き船には日本の善き物を積み、帰り船には彼の地に集まる善き物を積み、頻繁に交易をした地「安南」への憧れは日々に高まり、わたしは酩酊するよう夢と現の間をさまよったのだった。

海あがり

誰でも参加できるオークションに海あがりの安南染付が出品されていた。瑠璃釉一輪挿しの底には欠けがあり、貝殻がこびり付いている。その引揚品はどんな浪漫を語るのか。暴風雨で難破した船は沖に沈んでいる。柔らかい泥に覆われ海の底で眠りながら夢に耽っている。

さあ目を閉じて心の耳で聴いてみよう。

船倉の積荷は、縄で締められたままの木箱に、為せなかった務めを果たそうともがいている品々がある。

そのひとつは鹿の皮だ。それは鎧に陣羽織に使われ、本当なら合戦の先頭を切っていたはずだ。単皮の足袋に使われ檜の木のような商人の足を守り、歩きに歩いて難所の関を越えたはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

次の箱は香料だ。将軍みずからが所望する極上の品も、寺院が待つ品も、何重にも包まれて納められている。それは多くの御尊像を無垢な香りで包んだはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

次の箱は絹の布だ。染め、刺繍、金彩と綾なす意匠を施し、活躍めざましい城主やその跡取り凛々しい衣装に、また正室や側室のあでやかな衣装になったはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

次の箱は蘇木だ。鮮やかな紅に染める植物。白い絹を憧れの紅色のグラデーションに染め上げたはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

次の箱は鉛だ。これは白い顔料になり、絵師の筆に含まれ。線となり面となり。生き活きとし素晴らしい屏風になったはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

柔らかな泥のなかで、彼らの夢は生活の具となり日々愛用されること。こんな慎ましい夢が叶えられない。

そして、船乗りの魂たちは・・・針路を決める紅毛の者、屈強な乗組員たち、祈りを続けるパードレ、羽織袴の商人、一つ船に合い和している三百余名の者たちのうち、十三名が見つからない。

どの船には帰るべき港がある。待つ人がいる。たとえ破片となっても母港へ戻らねばならない。

たかが六千円ばかりで、ネットオークションで売られる沈没船の品々。引き揚げ船長の名前入りと写真入りで紹介されている。海あがりの品々は、売り物ではない。人類が結んだ異国との信頼の証、海洋交易という歴史遺産の一部なのだ。

安南幻想

十九世紀初め阮朝^{けん}が統一して越南と号して後も、再三他国の侵略を受け、北と南に分断され、苛まれても苛まれても誇り高く堪え抜き、ついに勝利し統一なった民族。いま繁栄の時来たる。

アゴタ・クリストフは小説「安南-愛の王国」のなかで十九世紀頃のヴェトナムをこのように著している。

「ジャライ族は、目に見えない精霊たちの住む世界を信じていた。神は、あらゆるもののうちに住まっているのである。どんなものの中にも、それが無生物であっても、魂が宿っている。これらのヴェトナム人たちは、賢く、穏やかだった。忍耐強く、彼らは、個々の霊が内に持つ宇宙を崇拝していた。雨が、そして月や風が、彼らに話しかける。」

安南ということばに、幻想を抱くのは、なにもわたしだけではない。時間が蕩けるように流れる平穩な彼の地は、まさしく安らかな南の国だ。

薫香の里

熱帯の濃密ないのちのやり取り、その競いがとめどなく深い森の中で収縮した。大ぶりの花は、香りのバリアを張り、隣のバリアに食込み、蝶を誘う。袋に蜜をしかけ、蟻を待つ植物、刺針を磨いて獲物を待つ葉、その長い潜み息。薫香の里はいのちの里だ。

外敵から身を守るため滲ませる自らの樹液に侵される木質の多難な一生はどうだ。時を経て硬化し、濁の川に身を落とすした沈香は、熱を与え薫じられて初めて妙なる香りを放つのだ。

こしゃく ほさつ
香積菩薩のみ言葉のように。そして安南にとれる極上の沈香は TAGARA（多伽羅）、そう黒沈香は伽羅と名付けられた。

香積菩薩

彼の菩薩曰く、『我が土の如来は、文字の説無し。ただ衆香を以って、諸の天人をして、律行（戒律）に入ることを得しめたもう。菩薩は、各々香樹の下に坐し、この妙香を聞いて、すなわち一切徳蔵三昧（一切の徳を蔵せる三昧）を獲（う）。この三昧を得る者は、菩薩の有らゆる功德を、皆悉く具足す。

魔の白粉

人は薄い皮膚をもつ。太陽の紫外線には弱い皮膚だ。人類の進化のなかで、日差しの強い地帯に適応するため皮膚にはメラニンが生成蓄積され、紫外線を自然にブロックした。それは、まさに適応の勝利だ。日差しの弱い地帯には当然のこと色白の人々がいる。それを美しいと感じたことが、人々を白粉への執着となった。物心つくころから、女は白粉を顔に塗り、紅を差すことを覚える。

もし、それが毒であったとしても、なお美しくなろうとする。それは魔が誘うからだ。いったん化粧をすれば、素顔を客人（まろうど）には魅せられない。絢爛豪華な縫い取りの衣装に、高く結った髪に匹敵する化粧をする、それは極めれば極めるほど白粉を厚く重ねることとなる。もはやそこにいるのは鉛の鉱物毒を知らず美の虜となったひとりの人形であった。

天恵の薬

天龍寺船で明に渡り、医学の漢籍や薬草を求めた父の嚙を聴いて育った少年が、長じて安南へと船出したとしてもなんら不思議ではない。

古今東西において人が一番に求めるのは心身の健康、長寿長命である。そのためには、薬草を求め、薬効あるとされる物を求めた。合成化学物質でなく、それは天恵の薬だ。動物が自らを癒すために、噛んだ樹皮や草だ。

熱帯は弱肉強食、強いものが勝つ、知恵のあるものが勝つ。そんな生命力が漲っている。木も花もそうだ。恋することすら、生命の争いだ。

花木に
敵を痺らせる
毒あり
薄め薄めて
人用い薬とす

象の行列

天竺やシャムでは神聖とされる大きな動物、優しい目をした象が初めてきたのは関ヶ原の戦いの翌年、三万七千里離れたベトナムから千二百人乗りの船で時の将軍・家康公に献上されたという。

虎、孔雀、象など熱帯の獰猛華麗な動物は島国日本にとっては珍しさ極まるものであり大層喜ばれる。異国への夢の種を少年にも植え付けてしまう。それは見た人の話や絵で世間にも広まっていく。襖絵に虎が描かれ勇猛で力の象徴ともなった。

そして吉宗公の求めにより二頭の象がまた日本へやってきた。唐船の船倉には象の檻が作られ、はるばるとひと月かけて長崎港へやってきた。それぞれの象使いも一緒にやってきた。

そのうち一頭は病でなくなり、あと一頭が江戸へ旅をした。歩かねばならぬ道は、象が彼の

国では神の化身、この国ではお上への献上もの故、道は小石までとりのぞかれ、水桶が置かれ、橋は普請され一日四里歩いた。

京のみやこでしばしの休養が与えられた。御所東の清浄華院には象小屋が建てられ、中御門上天皇に朝見をした。そのとき上皇より与えられた位が「広南従四位白象」。「ときしあらはひとの国なるけたものもけふこのへに見るそうれしき」と詠まれその喜びを表された。

のっしのっしと都大路を象の行列は練り歩いた。さらさらと写生する絵師のすがたもあった。やさしい目の象たちは吉宗公に喜ばれ浜御殿で飼われていたが、象の晩年は寂しかった。中野村で最期を終えたと聞く。

孔雀献上

安南の役人の家は瓦葺きで、家具調度は螺鈿細工、そして孔雀の羽根が多用されていたという。富裕の象徴ともいえる孔雀の羽根は、珍重された。徳川将軍に献上されて以来、腕の達者な絵師がその雄の羽根を写とった。筆を嘗めて尖らせ、骨描きし、それは、着物の意匠となり、上肢を合わせると孔雀紋となり、円満富裕を象徴した。実際に見た人々は孔雀のぎらりとした胸の金属光沢にまぶしさを感じ、翼を全開にした姿に魅惑された。そうして南洋への想いは止まなかったはず、まるで病のように。

玉手箱の煙

角倉船は、三百七十人乗りであった。布と網代の帆はたっぷりと風を孕み、海を渡っていった。縄に鉛の錘をつけて垂れ、四十尋より深いところには行かぬよう、慎重に陸に沿って進んでいったため、十七回のうち一度しか難破しなかった。そして、十六回の渡航で渡った何千人の人々の旅噺は、聞く人々を酔わせた、

ひとりは、近江のひと西村太郎右衛門。二十歳で海を渡り、向こうに住まいし妻子を得て二十年後に故郷に戻ってきたときには鎖国で入国が許されなかったという。そうしても望郷の想いは遂げられることなく異国の地で果てることとなる。

不憫に思った故郷の兄弟は日牟禮八幡宮に絵馬「安南渡海船図」を奉納をし彼の魂を迎えた。

もうひとりは、播磨のひと天竺徳兵衛。角倉船で渡航、安南、シャムに渡りヤン・ヨーステ

ンと共に天竺まで行きガンジス河の源流まで辿り、見聞録「天竺文書」を世に出した。のちに大（鶴屋）南北が天竺徳兵衛韓噺（いこくばなし）を書下ろし、いまでも歌舞伎の人気演目だ。乙姫様のくれた玉手箱の煙は消えない。

酔夢尽きず

安南へ

天竺へ

見知らぬ国へ

四百歳の吾

酔夢未だ尽きず

そうか、もう四百年も経ったのか。安南国には恩がある。難破船から放り出された乗組衆を助けて日本国へ送り届けてくれた。是非とも子孫の口を借りて御礼を云いたい。

この国も、京都も、栄えているか。子供たちは元気に遊んでおるか。若者は夢を追っておるか。商売は盛んにやっておるか。安南はどうなっておるか。まだ船はあるか。すべて首尾良く暮らしておるか。

ああ、吾は酔って夢を見ていただけか。善きものを交易し、互いに利する、この夢だけは、これからもずっと見果てることはない。

完

Annam Fantasia

Poetical Verse “Annam Fantasia”

Index

Vietnam souvenir

Having come from the sea

Annam fantasia

The Village of Incense

Devil’s white powder

Heavenly medicine

Procession of elephant

Present of peacock

Pandra's Box's Smoke

Never run out of drunken dreams

Vietnam souvenir

A friend of poetry in Osaka returned from a trip to Vietnam and gave me a vase dyed with indigo. The leaves of tropical trees were drawn smoothly in pale indigo. As the sweet scent of lotus tea receded, I suddenly felt the nostalgic sound of the ancient place name ``Annam" rising within me. Annam *Sometsuke*, it is still actively made.

400 years ago, early-modern Kyotoites loaded their ship with good Japanese goods, and on their return ship they loaded the good things that gathered in the area, and longed for Annan, a place where they frequently traded. Day by day, I wandered drunkenly between dream and reality.

Having come from the sea

Annam sometsuke found in the bottom of the sea was put up for auction. The bottom of the lapis lazuli glaze vase is chipped and has shells stuck to it. What kind of story does the missing treasure talk about? A ship wrecked by a storm is sunk offshore. Sleeping at the bottom of the sea covered in soft mud, indulging in dreams.

Now close eyes and listen with inner ear...

The cargo in the ship's hold was still tied up with ropes, and there are various items struggling to fulfill their unfulfilled duties of trade.

The cargo of the ship in the hold consists of wooden crates still tied with ropes, struggling to fulfill their unfulfilled duties.

One of them is deer skin. It was used for armor and

jinbaori, and if it was true, it should have taken the lead in the battle. It was used for single-skinned tabi and would protect the samurai's feet like an oak tree. These things repeat "We can't just turn into algae in the sea".

The next boxes are incense wood. The finest Kyara desired by the shogun himself and the materials waiting for big temples all over Japan are wrapped in multiple layers. It should have enveloped many Buddha statues with an innocent scent. They repeated "We can't just turn into algae in the sea".

"The next boxes are silk cloth." Dyed, embroidered, and decorated with gold and twilled designs, it must have become a dignified costume for the active lord of the castle and his heirs, as well as an attractive costume for the lawful wife and concubines. They repeated "We can't just turn into algae in the sea".

In the soft mud, their dream is to become a living

tool and be used daily. Such a modest dream cannot come true.

And the souls of the sailors... the red-haired ones who decide the course, the strong crew, the padre who keep praying, the haori and hakama merchants, and more than 300 people who are in harmony with one ship. Thirteen of them are still missing. Most of them survived. Village people helped and took care. Vietnamese authority sent them to Japan one year after.

Every ship has a port to return to. there are people waiting Even if it breaks into pieces, it must return to its home port.

"Items from a sunken ship sold at an online auction for just 6,000 yen." It is introduced with the name and photo of the salvage captain. Items from the sea are not for sale. It is part of the historical heritage of maritime trade, a proof of the trust that mankind has

formed with foreign countries.

Devil's white powder

"People have thin skin." The skin is vulnerable to the sun's UV rays. During the evolution of mankind, melanin was produced and accumulated in the skin to adapt to areas with strong sunlight, naturally blocking ultraviolet rays. It's just a triumph of adaptation. Naturally, there are fair-skinned people in areas where the sunlight is weak. People were obsessed with white powder because they found it beautiful. Ever since she can remember, she has learned to powder her face and make up it.

Even if it was poison, she would still try to be beautiful. It's because the devil invites you. Once she puts on makeup, her real face cannot be charmed by guests. Gorgeous sewn clothes, makeup comparable to high tied hair, the more you master it, the thicker the powder will be. Now there was a lone doll who was captivated by beauty without knowing the mineral poison of lead.

Annam fantasia

Even after the dynasty unified the country at the beginning of the century and called it Annam, it was repeatedly invaded by other countries, divided into the north and the south, endured pain and suffering with pride, and finally won and became a unified nation. Now is the time to prosper.

Agota Kristof describes Vietnam around the 19th century in his novel "Annam: The Kingdom of Love" in this way.

The Village of Incense

The dense exchange of life in the tropics, the competition endlessly contracted in the deep forest. The large flowers create a fragrant barrier, bite into the adjacent barrier, and attract butterflies. Plants that sprinkle nectar on their bags and wait for ants, leaves that polish their stingers and wait for their prey, and their long, latent breaths. The village of incense is the village of life.

What about the hard life of a woody tree that is affected by its own sap that it exudes to protect itself from foreign enemies? Agarwood, which has hardened over time and dropped into a muddy river, emits an amazing fine fragrance only when it is heated and smelled. Like only words. The finest agarwood harvested in Annam was named *Tagara*, and the black agarwood was named *Kyara*.

Incense Bodhisattva

The bodhisattva said, "The Tathagata Bodhisattva of our country has no written discourse. He only with his incense he got all the celestial beings to enter into the precepts. Each bodhisattva sits under an incense tree, listens to this wonderful fragrance, and attains the samadhi that holds all virtues. Those who attain this Samadhi receive all the bodhisattvas' merits".

Heavenly medicine

It would not be surprising if a boy who had grown up listening to his father's stories about traveling to Ming on a Tenryu-ji ship and seeking medical Chinese classics and medicinal herbs set sail for Annam.

In all ages and countries, what people most desire is mental and physical health and longevity. To do so, he searched for medicinal herbs and sought for things that were said to have medicinal properties. Not a synthetic chemical, it's a miracle drug. The bark and grass that animals chew to heal themselves.

In the tropics, the fittest wins, the strong wins, and the wise wins. Such vitality is rising.

So are trees and flowers. Even falling in love is a struggle for life.

in the flower tree

Numb the enemy

There is poison

Dilute dilute...

Medical for human use

Procession of elephant

In Tenjiku and Siam, a large, kind-eyed animal considered sacred first arrived in the year following the Battle of Sekigahara on a ship carrying 1,200 people from Vietnam, 37,000 miles away. It is said to have been introduced to Shogun.

Fierce and gorgeous tropical animals like tigers, peacocks, and elephants are extremely rare and highly prized for the island nation of Japan. The seed of a dream in a foreign country is also planted in the boy. It spreads around the world through the stories and images of the people who see it. Tigers were painted on fusuma paintings and became a symbol of courage and power.

At Lord Yoshimune's request, two elephants returned to Japan. A cage for the elephant was built in the hold of the ship and it took a month to reach the port of Nagasaki. Every mahout also came with them.

One of them was no longer sick and the other went to Edo. The path that must be taken is that the elephant is an incarnation of God in his country, and in this country it is an offering to the superior, therefore the cobblestones are also removed from the path, buckets of water are placed, they are built bridges, and four miles a day. he walked.

Kyoto was given a short rest. An elephant hut was built in the *Seijo-goin* temple east of the imperial palace, where Emperor Nakamikado met. At that time, the rank awarded by the retired emperor was "Konan Junior Fourth Rank White Elephant". He expressed his delight at him by composing: "It is a joy to see here the beasts of the land of humans."

A procession of elephants paraded through main street. There was also the look of a softly sketching painter (*Ito Jakuchu*). The kind-eyed elephants were loved by Lord Yoshimune and kept in the beach palace, but the elephants were lonely in their last

years. I heard that he finished his last days in Nakanomura.

Present of peacock

It is said that the houses of officials in Annam had tiled roofs, and the furnishings were made with mother-of-pearl work, and peacock feathers were often used. Peacock feathers, a symbol of wealth, were prized. Ever since it was presented to the Tokugawa shogun, skilled painters have taken design of the male's feathers. The brush was sharpened and drawn with delicate line and it became the design of the kimono, and when the upper limbs were put together, it became a peacock pattern, symbolizing wealth and well-being. People who saw the peacock were fascinated by the dazzling metallic luster of the peacock's chest and the sight of the peacock with its wings fully open. And so my feelings for the South Seas should not have stopped, like an illness.

Pandra's Box's Smoke

The Suminokura ship had a capacity of 370 people. The sails of cloth and wickerwork were filled with plenty of wind and crossed the sea. With lead weights attached to the ropes to measure the depth of the sea, he proceeded carefully along the land, not deeper than 73 meters, so that he was shipwrecked only once out of seventeen times. And the tales of the thousands of people who crossed the sixteen voyages intoxicated those who heard them.

One is Taroemon Nishimura, a man from Omi. It is said that he crossed the sea at the age of 20, lived there, got a wife and children, and when he returned to his hometown 20 years later, he was not allowed to enter the country because of isolation. Even so, the dream of nostalgia will not be fulfilled and it will end in a foreign land.

Feeling pity for him, his brother from his hometown

dedicated an ema "Annam Trade ship painting" to Himure Hachimangu Shrine to welcome his soul.

The other is Tenjiku Tokubei from Harima. He traveled on a sumokura ship, traveled to Annam and Siam, traveled to Tenjiku (india) with Jan Joosten, traced the source of the Ganges River, and published his memoirs afterward, "Tenjiku Documents." Later, Nanboku (Tsuruya) wrote the Tenjiku Tokubei Hanbanashi (Ikoku Banashi), which is still a popular Kabuki play. The smoke from the Tamatebako (pandra box)that Otohime-sama heroine gave me will not disappear.

Never run out of drunken dreams

To Annam

To Tenjiku

to a strange country

I am four hundred years old

I'm still drunk

Has four hundred years already passed? We thank Annam still now. Villagers helped the crew who were thrown out of the shipwreck and, after cared, sent them back to Japan by authorities. I would like to express my gratitude through the mouth of my descendants.

"Is this country and Kyoto prospering?" Are the children playing well? Are young people chasing their dreams? Are you doing a lot of business? How is Annam? do you still have the boat? Are you all well?

"Ah, I was just dreaming when I was drunk." Only

this dream of trading good things and mutual benefit
will never be fulfilled for me.

Annam Fantasia

Versetto poetico “Annam Fantasia”

Indice

Ricordo del Vietnam

Essendo venuto dal mare

Annam fantasia

Il villaggio dell'incenso

Incenso bodhisattva

Polvere del diavolo

Medicina celeste

Processione degli elefanti

Regalo di pavone

Il fumo di Pandra's Box

Non esaurire mai i sogni da ubriachi

Ricordo del Vietnam

Un amico di poesia di Osaka è tornato da un viaggio in Vietnam e mi ha regalato un vaso tinto di indaco. Le foglie degli alberi tropicali erano disegnate uniformemente in un pallido indaco. Quando il dolce profumo del tè di loto si affievolì, improvvisamente sentii sorgere dentro di me il suono nostalgico dell'antico nome di luogo "Annan". Annam Sometsuke, è ancora attivamente realizzato.

400 anni fa, i Kyotoiti della prima età moderna caricarono la loro nave con buone merci giapponesi, e sulla loro nave di ritorno caricarono le cose buone che si raccoglievano nella zona, e desideravano Annam, un luogo dove commerciavano frequentemente. Giorno dopo giorno, vagavo ubriaco tra sogno e realtà, fantasie di Annam.

Essendo venuto dal mare

Ananm sometsuke trovato in fondo al mare è stato messo all'asta. Il fondo del vaso smaltato di lapislazzuli è scheggiato e presenta delle conchiglie attaccate. Di che tipo di storia parla il tesoro scomparso? Una nave naufragata da una tempesta viene affondata al largo. Dormire in fondo al mare ricoperto di soffice fango, abbandonarsi ai sogni.

Ora chiudi gli occhi e ascolta con l'orecchio interno...

Il carico nella stiva della nave era ancora legato con funi e ci sono vari oggetti che lottano per adempiere ai loro doveri di commercio non adempiuti.

Il carico della nave nella stiva è costituito da casse di legno ancora legate con funi, che faticano ad adempiere ai propri doveri non adempiuti.

Uno di questi è la pelle di cervo. Era usato per

armature e jinbaori e, se fosse vero, avrebbe dovuto prendere il comando della battaglia. Era usato per i tabi monopelle e proteggeva i piedi del samurai come una quercia. Queste cose ripetono "Non possiamo semplicemente trasformarci in alghe nel mare".

Le scatole successive sono in legno di incenso. Il miglior Kyara desiderato dallo stesso shogun e i materiali in attesa dei grandi templi di tutto il Giappone sono avvolti in più strati. Avrebbe dovuto avvolgere molte statue di Buddha con un profumo innocente. Hanno ripetuto "Non possiamo semplicemente trasformarci in alghe nel mare".

"Le prossime scatole sono di stoffa di seta." Tinto, ricamato e decorato con disegni dorati e intrecciati, doveva essere diventato un costume dignitoso per l'attivo signore del castello e i suoi eredi, nonché un costume attraente per la legittima moglie e le concubine. Hanno ripetuto "Non possiamo

semplicemente trasformarci in alghe nel mare".

La casella successiva è l'albero di Suou. Una pianta dal colore rosso vivo. La seta bianca avrebbe dovuto essere tinta con la gradazione rossa che la gente desiderava. Hanno ripetuto "Non possiamo semplicemente trasformarci in alghe nel mare".

La casella successiva è Piombo. Questo diventa il pigmento bianco ed è incluso nel pennello del pittore. Diventa una linea e una superficie. Doveva diventare un vivace e splendido paravento pittorico. Hanno ripetuto "Non possiamo semplicemente trasformarci in alghe nel mare".

Nel fango soffice, il loro sogno è quello di diventare uno strumento vivo e da usare quotidianamente. Un sogno così modesto non può avverarsi.

E le anime dei marinai... quelli dai capelli rossi che decidono la rotta, il forte equipaggio, il padre che

continua a pregare, i mercanti haori e hakama, e più di 300 persone che sono in armonia con una nave. Tredici di loro sono ancora dispersi. La maggior parte di loro è sopravvissuta. La gente del villaggio aiutava e si prendeva cura di loro. L'autorità vietnamita li ha inviati in Giappone un anno dopo.

Ogni nave ha un porto a cui tornare. ci sono persone che aspettano Anche se va in pezzi, deve tornare al suo porto di origine.

"Oggetti di una nave affondata venduti a un'asta online per soli 6.000 yen." Viene presentato con il nome e la foto del capitano di salvataggio. Gli oggetti del mare non sono in vendita. Fa parte del patrimonio storico del commercio marittimo, una prova della fiducia che l'umanità ha stretto con l'estero

Annam fantasia

Anche dopo che la dinastia unificò il paese all'inizio del secolo e lo chiamò Annam, fu ripetutamente invaso da altri paesi, diviso in nord e sud, sopportò dolore e sofferenza con orgoglio, e alla fine vinse e divenne una nazione unificata. Ora è il momento di prosperare.

Agota Kristof descrive così il Vietnam intorno al XIX secolo nel suo romanzo "Annam: Il regno dell'amore".

“La tribù Jarai credeva in un mondo abitato da spiriti invisibili. Dio risiede in tutte le cose. Questi vietnamiti erano saggi e gentili, pazienti, adoravano l'universo che ogni spirito racchiudeva, la pioggia, la luna e il vento parlavano con loro.

Non sono l'unico che ha fantasie sulla parola Annam. La sua terra pacifica, dove il tempo sembra dissolversi, è davvero un pacifico paese del sud.

Il villaggio dell'incenso

Il fitto scambio di vita ai tropici, la competizione che si contrae all'infinito nella fitta foresta. I grandi fiori creano una barriera profumata, mordono la barriera adiacente e attirano le farfalle. Piante che cospargono di nettare le loro borse e aspettano le formiche, foglie che lucidano i loro pungiglioni e aspettano la loro preda, e i loro respiri lunghi e latenti. Il villaggio dell'incenso è il villaggio della vita.

Che dire della dura vita di un albero legnoso che risente della propria linfa che trasuda per proteggersi dai nemici estranei? Il legno di agar, che si è indurito nel tempo ed è caduto in un fiume fangoso, emette una straordinaria fragranza fine solo quando viene riscaldato e annusato. Come solo parole. Il miglior legno di agar raccolto in Annam si chiamava Tagara, e il legno di agar nero si chiamava Kyara.

Incenso bodhisattva

Il bodhisattva disse: "Il Tathagata Bodhisattva del nostro paese non ha discorsi scritti. Solo con il suo incenso ha fatto entrare tutti gli esseri celesti nei precetti. Ogni bodhisattva siede sotto un albero di incenso, ascolta questa meravigliosa fragranza e raggiunge il samadhi che contiene tutte le virtù. Coloro che raggiungono questo Samadhi ricevono tutti i meriti dei bodhisattva".

Polvere del diavolo

"Le persone hanno la pelle sottile." La pelle è vulnerabile ai raggi UV del sole. Durante l'evoluzione dell'uomo, la melanina è stata prodotta e accumulata nella pelle per adattarsi alle zone con forte luce solare, bloccando naturalmente i raggi ultravioletti. È solo un trionfo dell'adattamento. Naturalmente, ci sono persone dalla pelle chiara nelle zone dove la luce del sole è debole. Le persone erano ossessionate dalla polvere bianca perché la trovavano bella. Da quando riesce a ricordare, ha imparato a incipriarsi il viso ea truccarlo.

Anche se fosse veleno, cercherebbe comunque di essere bella. È perché il diavolo ti invita. Una volta truccata, il suo vero volto non può essere affascinato dagli ospiti. Splendidi vestiti cuciti, trucco paragonabile ai capelli raccolti in alto, più lo padroneggi, più densa sarà la polvere. Ora c'era una bambola solitaria che era affascinata dalla bellezza

senza conoscere il veleno minerale del piombo.

Medicina celeste

Non sarebbe sorprendente se un ragazzo cresciuto ascoltando le storie di suo padre sul viaggio a Ming su una nave Tenryu-ji e alla ricerca di classici cinesi medici ed erbe medicinali salpasse per Annam.

In tutte le età e paesi, ciò che le persone desiderano di più è la salute mentale e fisica e la longevità. Per fare ciò, ha cercato erbe medicinali e ha cercato cose che si diceva avessero proprietà medicinali. Non è una sostanza chimica sintetica, è una droga miracolosa. La corteccia e l'erba che gli animali masticano per curarsi.

Ai tropici vince il più forte, vince il forte e vince il saggio. Tale vitalità sta aumentando.

Così sono alberi e fiori. Anche innamorarsi è una lotta per la vita.

nell'albero dei fiori

Intorpidire il nemico

C'è del veleno

diluire, diluire...

Medico per uso umano

Processione degli elefanti

Nel Tenjiku e nel Siam, un grande animale dagli occhi gentili, considerato sacro, arrivò per la prima volta nell'anno successivo alla battaglia di Sekigahara su una nave che trasportava 1.200 persone dal Vietnam, a 37.000 miglia di distanza. Si dice che sia stato presentato a Shogun.

Animali tropicali feroci e splendidi come tigri, pavoni ed elefanti sono estremamente rari e molto apprezzati per la nazione insulare del Giappone. Nel ragazzo è piantato anche il seme di un sogno in un paese straniero. Si diffonde nel mondo attraverso le storie e le immagini delle persone che lo vedono. Le tigri sono state dipinte su dipinti fusuma e sono diventate un simbolo di coraggio e potere.

Su richiesta di Lord Yoshimune, due elefanti tornarono in Giappone. Nella stiva della nave è stata realizzata una gabbia per l'elefante e ci è voluto un

mese per raggiungere il porto di Nagasaki. Anche ogni mahout veniva con loro.

Uno di loro non era più malato e l'altro si recò a Edo. La strada che si deve percorrere è che l'elefante è un'incarnazione di Dio nel suo paese, e in questo paese è un'offerta al superiore, quindi si toglie la strada anche ai ciottoli, si mettono secchi d'acqua, si costruiscono ponti, e quattro miglia al giorno. camminava.

A Kyoto fu concesso un breve riposo. Una capanna per elefanti fu costruita nel tempio Shoge-in a est del palazzo imperiale, dove si incontrò l'imperatore Nakamikado. A quel tempo, il grado assegnato dall'imperatore in pensione era "Konan Junior Fourth Rank White Elephant". Ha espresso la sua gioia componendo: "È una gioia vedere qui le bestie della terra degli umani".

Una processione di elefanti ha sfilato per Miyakooji. C'era anche l'aspetto di un pittore che schizzava

dolcemente. Gli elefanti dagli occhi gentili erano amati da Lord Yoshimune e venivano tenuti nel palazzo sulla spiaggia, ma gli elefanti erano soli nei loro ultimi anni. Ho sentito che ha finito i suoi ultimi giorni a Nakanomura.

Regalo di pavone

Si dice che le case dei funzionari ad Annam avessero i tetti di tegole e gli arredi fossero realizzati con lavori in madreperla e spesso venivano usate piume di pavone. Le piume di pavone, simbolo di ricchezza, erano apprezzate. Da quando è stato presentato allo shogun Tokugawa, abili pittori hanno preso il dessin dalle piume del maschio. Il pennello è stato affilato e disegnato con una linea delicata ed è diventato il disegno del kimono, e quando gli arti superiori sono stati uniti, è diventato un motivo a pavone, che simboleggia ricchezza e benessere. Le persone che hanno visto il pavone sono rimaste affascinate dall'abbagliante lucentezza metallica del petto del pavone e dalla vista del pavone con le ali completamente aperte. E quindi i miei sentimenti per i mari del sud non avrebbero dovuto cessare, come una malattia.

Il fumo di Pandora's Box

La nave Suminokura aveva una capacità di 370 persone. Le vele di stoffa e vimini erano piene di vento in abbondanza e attraversavano il mare. Con dei pesi di piombo attaccati alle funi per misurare la profondità del mare, procedeva con cautela lungo la terraferma, non più profondo di 73 metri, tanto che fece naufragio solo una volta su diciassette volte. E i racconti delle migliaia di persone che hanno attraversato i sedici viaggi hanno inebriato chi li ha ascoltati.

Uno è Taroemon Nishimura, un uomo di Omi. Si dice che abbia attraversato il mare all'età di 20 anni, vissuto lì, preso moglie e figli, e quando è tornato nella sua città natale 20 anni dopo, non gli è stato permesso di entrare nel paese a causa dell'isolamento. Anche così, il sogno della nostalgia non si realizzerà e finirà in terra straniera.

Provando pietà per lui, suo fratello della sua città natale ha dedicato un ema "Annam Trade ship painting" al Santuario di Himure Hachimangu per dare il benvenuto alla sua anima.

L'altro è Tenjiku Tokubei di Harima. Ha viaggiato su una nave sumokura, ha viaggiato nell'Annam e nel Siam, si è recato a Tenjiku (India) con Jan Joosten, ha rintracciato la sorgente del fiume Gange e in seguito ha pubblicato le sue memorie, "Tenjiku Documents". Più tardi, Nanboku (Tsuruya) scrisse il Tenjiku Tokubei Hanbanashi (Ikoku Banashi), che è tuttora una popolare commedia Kabuki. Il fumo del Tamatebako (scatola di pandra) che mi ha regalato l'eroina Otohime-sama non scomparirà.

Non esaurire mai i sogni da ubriachi

Ad Annam

A Tenjiku

in uno strano paese

Ho quattrocento anni

Sono ancora ubriaco

Sono già passati quattrocento anni? Ringraziamo Annam ancora adesso. Gli abitanti del villaggio hanno aiutato l'equipaggio che è stato gettato fuori dal naufragio e, dopo essersi preoccupati, li ha rimandati in Giappone dalle autorità. Vorrei esprimere la mia gratitudine attraverso la bocca dei miei discendenti.

"Questo paese e Kyoto stanno prosperando?" I bambini giocano bene? I giovani inseguono i loro sogni? Fai molti affari? Come sta Annam? hai ancora la barca? State tutti bene?

"Ah, stavo solo sognando quando ero ubriaco." Solo

questo sogno di scambiare cose buone e mutuo vantaggio non si realizzerà mai per me.